藤丸さんちのカルデア事情

アーニャX【オルタ】

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理を救う役目を背負った人類最後のマスターと、サーヴァント達が紡ぐなんでもない日常のお話。

誰にも知られることのない、彼らだけの特別なお話。

目　次

マシュ／ホワイトデーのお返し　1
マシュ／五月病　8
マシュ／水着ガチャ　16
ジャンヌ・オルタ／愛とは何か　27

マシュ／ホワイトデーのお返し

人理継続保障機関カルデア。
滅んでしまった人類史を取り戻すために活動する機関であり、人類史の英霊――サーヴァントの力を借りて日夜戦い続けている。
これは、そんなカルデアの唯一のマスターとなってしまった男と、サーヴァントの送る、非日常で、愉快で、後で絶対黒歴史になるような、そんな物語である。
３月１４日。早朝。カルデアの食堂に一人の男がいた。
偶然により生き残り、人理を救う使命を全うする羽目になった４８人目のマスター――藤丸立香（ふじまるりつか）である。
彼は食堂に隣接するキッチンで、ひたすらに作業に従事していた。手元には、ページの開いた料理本と数々の調理器具がある。
本とにらめっこし、おっかなびっくり調理器具を動かす彼の姿には、真摯な想いが感じられた。
「マスター、随分と精が出るな」
そんな立香に声をかける男がいた。
赤い外套に黒いインナー、白髪で色黒という目立つ見た目をしながらも、柔和な笑顔を浮かべる青年だ。
青年の名前はエミヤ。カルデアの召喚に応じた英霊の一人で、類いまれなる家事スキルからカルデアの食卓事情を一手に担うエリート（オカン）である。
「エミヤか。おかげさまでどうにか形になってきたよ」
調理の手を止め、立香はエミヤと話し始める。
「ホワイトデーにカルデアの全サーヴァントにお返しをする、と言い出した時はどうなるかと思っていたが、今のところ問題はなさそうだな」
「うん。エミヤが教えてくれたクッキーの焼き方のおかげだよ」
ホワイトデー。
世に言うところのバレンタインのお返しをする日。
カルデアに常駐しているサーヴァント達から――男女共に――

チョコをあげたり貰ったりした立香は、律儀にも全員にホワイトデーのお菓子を作ることを考えたのだ。
　しかし料理など素人同然だったため、カルデアの食卓事情を担うエミヤに助けを乞うたのだ。
　結果として、立香は短期間でクッキー作りを身に付け、今現在、その腕前を生かして大量のクッキーを量産しているのだった。
「これなら今年のホワイトデーも滞りなく終われそうだな」
「うん。問題ないと思う。――それでさ、エミヤ。あっちの方はどうなってる？」
　後半の部分は声を抑えて、エミヤに聞く立香。
　同じようにエミヤも声を潜めて。
「あちらも問題はない。全員快く承諾してくれたよ」
「そうか、良かった」
「しかしいいのか？　君の立場的にかなり危ないと思うぞ。一人に対してそのようなことをするなど」
　立香の身を案じるように、エミヤは言う。実際、彼らが進めていることが他に漏れた場合、立香は無事ではすまないだろうからだ。
　それでも立香は。
「いや、やるよ。こればかりは譲れない。今日この日だけの、俺のワガママだ」
　強い意志を称えた表情で言った。それを見て、エミヤも頷く。
「分かった。君がそこまで言うなら私も最後まで協力しよう」
「ありがとうエミヤ。迷惑をかけるね」
「なに、これくらい騎士王達の食事に比べれば安いものさ」
　そう言ってエミヤはキッチンを出て、食堂から去っていった。
　立香も作り終えたクッキーを袋に包装していき、全て詰め終わるとカルデア中に配り歩き始めた。
★
「先輩にこの部屋へ来るように言われましたが、一体何があるんでしょうか。どう思います、フォウさん？」
「フォ～ウ」

数時間後。カルデアの廊下に佇む一人の少女がいた。
少女の名前は、マシュ・キリエライト。カルデアに勤務する職員であり、サーヴァントと融合し力を得たデミ・サーヴァントである。
立香を先輩と慕い、彼と共に特異点を巡る戦いを乗り越えてきた相棒と呼べる。
そんな彼女は、カルデア内の一室の前に立っている。そこは普段は軽い遊戯スペースとして使われている場所で、立香に言われてやって来たマシュは、こんなところで何をするのかといぶかしんだ。
「取り敢えず入ってみましょうか、フォウさん」
「フォウ!」
少なくとも先輩が言っていたのだから、悪いことは起こらないだろう、と判断したマシュは部屋に入ることにした。
ちなみにフォウさんとは、マシュの肩に乗っている白い毛並みのリスっぽい生き物である。
扉に手をかけゆっくり開く。室内に電気は付いておらず、マシュは少しだけ眉をひそめる。一応用心して少しずつ足を進める。
「あれ、おかしいですね。いつもなら――」
部屋の中に入ったところで気付く。いつもならそれなりの遊び道具が置いてあるはずなのに、今は何一つない。正確には普段は無いはずのついたてが置いてあるだけだった。
どういうことか、とマシュが思っていると、後ろの扉が急に閉まった。突然闇に覆われたことでマシュは警戒体勢になる。
「な、何事ですか!?」
デミ・サーヴァントとしての危機管理能力で、今の状況があまりよろしくないとマシュは判断した。武装をするべきか、と思っていると突然部屋の明かりが付く。
マシュが思わず硬直していると、ついたての向こうから誰かが現れた。
「ウフフ、よく来たわね、マシュ。待っていたわ」
「待ちくたびれたわ」
「メディアさんにマタ・ハリさん？　何故お二人がここに？」

ついたてから出てきたのは、キャスターのメディアとアサシンのマタ・ハリだった。接点が無さそうな二人がここにいることに、マシュは首を傾げる。
「何故かって？　あの坊やに頼まれたからよ」
「先輩に？　一体何を――」
「ウフフ、それはね」
突然、マタ・ハリがマシュの背後に回り、両肩に手を置いてくる。さらにメディアは怪しい手付きでこちらに迫ってくるので、マシュは困惑した。
「な、何をする気ですか？」
「大丈夫よ、ちょっとお着替えするだけだから」
「ええ。大人しくしていればすぐに終わるわ」
「き、着替え？　何故いきなりそんな――!?」
マシュが疑問を差し挟む余裕もなく、メディアとマタ・ハリによるお着替えが始まってしまった。
数分後。
「うんうん、私の見立て通り。よく似合ってるわ」
「ええ。サイズもピッタリね」
「うう……なんでこんな……」
あっという間に着替えさせられたマシュは、白いドレスを着せられていた。肩から上を露出し、胸元を強調したそのデザインに、マシュは赤面して床に座り込む。その様子を見て、満足そうに頷くメディアとマタ・ハリ。
「こんなことをするのが、先輩の頼みなんですか……？」
「ええそうよ。あの子ももうすぐ来るんじゃないかしら」
マタ・ハリがそう答えた時。
「お、もう着替え終わったんだ」
部屋の扉が開き、立香の声が聞こえてきた。
文句を言おうと座ったまま視線を向けたマシュだったが、その瞬間、言葉を失った。
立香は、いつものカルデア制服ではなく、黒のタキシードを着てい

た。表情も普段の柔らかそうな雰囲気ではなく、引き締まったものになっている。
　それだけで一気に大人っぽく見え、マシュは思わず見とれてしまっていた。
「大丈夫、マシュ。立てる？」
　立香が近くまで来て、こちらに手を差し出してきたことで、ようやく正気に戻るマシュ。そして真っ先に自分の身体を隠して。
「先輩、最低です」
「なんで⁉」
「お二人に頼んで私にこんな格好を無理矢理させるなんて……一体何を考えてるんですか？」
　恥ずかしさから顔を真っ赤にし、抗議するマシュ。
　立香は困ったように頭を掻いて答える。
「実はね、ホワイトデーのお返しに、マシュとダンスをしたいと思ってさ」
「ダンス……ですか？」
　思いがけない言葉にマシュは首を傾げる。何故お返しがダンスなのだろうか？
「ほら、新宿に行った時に俺がアルトリアオルタとダンスしてる時に、羨ましそうだったってダヴィンチちゃんから聞いてさ。もしかして踊りたかったのかなって思って……」
　確かにあのときは作戦上仕方なかったとはいえ、アルトリアオルタと踊る立香に、並々ならぬ感情を抱いていたのは事実だ。
　しかしそれが本人にバレているとは思っておらず、マシュはどうしていいのか分からなくなる。
　そんなマシュを見て、立香はさらに続ける。
「それに、さ。俺もマシュとダンスをしたいな……って思ったから、今回こんなことをしてみたんだけど……駄目だったかな？」
「先輩が……私とですか？」
「うん」
　思わぬ言葉にさらにマシュの思考は固まる。

実際のところ、かなり嬉しいと思う。一度で良いから立香と優雅な踊りをしてみたいという想いは、マシュの中にあった。
しかし、それを妨げる色んな障害があるのも事実だった。
「無理ですよ……私、踊りなんて経験ありませんし……」
「俺がリードするから大丈夫。結構練習したんだよ？」
「もし、他の人にバレたら……」
「メディアやマタ・ハリには極秘に進めてもらったし、エミヤや他にも何人かにはバレたらヤバイサーヴァントを抑えるのを頼んであるよ」
「そ、そもそも、私なんかじゃ先輩と釣り合わ――」
「マシュ」
言葉を塞ぐように、立香の指がマシュの唇に触れる。
目を見開いて硬直するマシュに対して、立香は畳み掛ける。
「俺は、君と、ダンスを踊りたい。他の誰でもない、マシュ・キリエライトと」

真っ直ぐな瞳で立香は言い切る。
そんな瞳で見つめられ、マシュはしどろもどろになってしまう。
「えと、あの、本当に……私で良いんですか？」
「うん、もちろん」
「そ、それでは、よろしくお願いします……」
立香が差し出してきた手を取り、マシュは立ち上がる。その顔はすでに熟れたリンゴのように、赤く染まっていた。
「それじゃあ、私達は失礼するわね」
「ごゆっくり。お二人様」
マシュが立ち上がったのを見て、メディアとマタ・ハリも部屋を出ていく。立香とマシュの二人きりとなった。
「それじゃ、音楽かけようか」
立香はポケットから端末を取りだし、それを操作する。すると、端末からダンス用の音楽が再生される。メディア達が使ったテーブルに端末を置き、立香はマシュに向き直る。

「では改めて、マシュ」
「は、はい」
「Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ?」
片膝をつき、手を取ってマシュに問う。マシュも笑顔で。
「はい。喜んで」
その答えに立香は満足気に笑みを浮かべ、マシュをリードしながら、踊り始めた。
誰にも知られず、見られることもなく、二人きりの踊りは、一晩中続いたという。

マシュ／五月病

その日、藤丸立香は一人で目を覚ました。
ベッドの上で上体を起こし、ゆっくりと伸びをする。それから壁にかけてある時計へと目を向ける。時刻はすでに9時を回っていた。
別に用事もなく、この時間に起きることに問題はないが、一つの疑問が頭に浮かんだ。
「今日はマシュが起こしに来なかったな……」
そう、特異点での旅が始まった日から、毎朝起こしに来てくれていたマシュが、やってこなかったのだ。今までにないことに立香は首をかしげる。
とりあえず何かあったのか、と思い、食堂に行ってみることにした。もしかしたらそこでマシュが待っているかもしれない。
食堂に行ってみると、ダヴィンチちゃんがいた。珍しい人物に立香は少し驚く。
「おはよう、ダヴィンチちゃん。珍しいね、食堂にいるなんて」
「おはよう、藤丸君。そんなに珍しいものでもないだろう？」
ダヴィンチは苦笑しながら言う。立香は彼女の前の席に座り、気になっていたことを口にした。
「そういえば、今朝マシュが部屋に来なかったんだけど、ダヴィンチちゃん何か知らない？」
「うん？　ああ、そのことね」
立香の問いに、ダヴィンチは含みがあるように答える。
「何、理由知ってるの？」
「まあ、一応ね。ちょっと着いてきたまえよ」
そう言って、ダヴィンチは立ち上がり食堂を出ていく。立香も急いでその後を追う。
しばらく歩くと、ダヴィンチは足を止める。そこはマシュの部屋の前だった。
「マシュの部屋？　もしかして何かあった？」
「うん、ちょっとね。とりあえず入ろうか」

ダヴィンチはポケットからカードキーを取り出す。カルデアの各部屋の扉を開けるマスターキーだ。
カードを読み込むと、自動で扉が開き中の様子が見えるようになる。ゆっくりと立香は部屋に足を踏み入れる。
部屋の中は静かだった。特に装飾が施されているわけでもなく、シンプルな内装であり、一種の寒々しさを感じさせる。
部屋の隅にあるベッドには、布団に潜り込んで眠っている者がいた。
部屋の主であるマシュ・キリエライトだ。マシュは布団に包まり、安らかに眠り続けている。
「マシュ？　まだ寝てるのか？」
「ああ、そうなんだよ。とりあえず起こしてくれるかい？」
ダヴィンチはマシュを起こすように立香を促す。立香は頷き、ベッドへと近づく。
「マシュ。朝だよ、起きて」
「う～ん……せんぱい……？」
立香の声に反応し、マシュは目を覚ます。しかしその瞳はまだ完全には覚醒しておらず、どこか夢現（ゆめうつつ）な様子だった。
「おはよう、マシュ。もう起きよう？」
「……嫌です」
「え？」
「……起きたくないです……」

マシュはもぞもぞと布団の中に頭を引っ込め、完全に二度寝の態勢に入った。予想外の展開に立香は絶句する。
後ろで見ていたダヴィンチは、この展開が分かっていたかのように笑いをこらえていた。
「ダヴィンチちゃん、どういうこと？」
「うん、今朝からこの調子なんだ。これは……」
「これは……？」

トーンを落として語るダヴィンチを見て、立香は息を呑む。一体マシュに何が起こったというのか？
「これは間違いなく……五月病だ」
「……え？」
「もう一度言うよ。マシュは五月病だ」
ダヴィンチは真剣な顔で言う。対する立香はポカンとした表情で固まってしまう。予想外の発言に、耳を疑ってしまった。
しかし、今のマシュの状態はだらけきってやる気が全く感じられない。確かに五月病と言われる状態に酷似していた。立香はそれでもと首を振り。
「でも、なんでよりによってマシュが五月病になるんだ？　しかももう五月も終わりなのに」
「さあね。大方これまでの疲れの反動が出たんじゃない？」
ダヴィンチはさらっと答える。立香は反論しかけるが、思いとどまる。
今まで、マシュは懸命に頑張ってきた。立香と共に戦い、共に笑い、共に泣き、共に歩んできた。その旅はマシュの心身に見えない負担を積み重ねてきたことだろう。
その反動が今出たと考えれば、五月病になるのも仕方ないと言える。
だが、立香にはもう一つ疑問が生まれた。
「なんで今更反動が出てくるのさ。もしかしてダヴィンチちゃん、何かした？」
「さて、なんのことかな」
素知らぬ顔で、しかし口元を愉快そうに緩めながらダヴィンチは答える。その態度で、このマシュの状態がダヴィンチの差し金であることが、容易に想像できた。
抗議しようと立香が口を開くより先に、ダヴィンチは部屋のドアまで移動し。
「それじゃ、あとは君に任せたよ、藤丸君」
「あ、ちょっと！」

立香に追及される前にダヴィンチは部屋から出て行ってしまう。取り残された立香はどうするべきかとベッドで眠るマシュを見る。
マシュは安らかな顔で眠っている。警戒心など欠片もなく、間近であれほど騒いだのに少しも反応を見せなかった。
普段から可憐な容姿をしているマシュだが、眠っているときはまた違った可愛らしさを見せている。具体的にはあどけない雰囲気を醸し出している。
いつしか立夏は、膝をかがめてマシュの寝顔を間近で見ていた。ゆっくりと、だが確実に顔が近づいていく。もっとこの可愛らしい姿を近くで見たいと、無意識に思ってしまっていた。
「うぅぅん……」
突如、マシュが声を出しながら身もだえしたので、立香はすぐさま体を起こす。いつの間にか近付き過ぎていたことに、この時気付き、愕然とする。
そんな立香の動揺など全く知らぬ、と言わんばかりにマシュはゆっくりと目を開ける。ベッドの上で体を起こし、ぼんやりと周りを見回している。
その未だ覚醒しきっていない動作に、立香は思わず笑みをこぼす。あのマシュがこんなに隙だらけの姿を見せることと、そんな姿を現状一人占め出来ていることが面白く感じたのだ。
「改めておはよう、マシュ。よく眠れた？」
立香は微笑を浮かべたまま、マシュに声をかける。マシュはまだ寝ぼけ眼といった感じであったが、立香の姿を認めると微笑み返した。
「おはようございます、先輩。さっきぶりですね」
「うん、マシュが二度寝しちゃったからね」
立香はベッドに腰かけ、からかうように言う。マシュも反論しようとするが、眠気からか上手く言葉が出ず、何も言わない。
「そうだ、朝ご飯はどうする？　何か貰ってこようか？」
「はい、お願いできますか？　正直、まだ眠気が強くて、自分で食堂に行けそうにないです」
「うん、任せて」

そう言って立香は立ち上がり、部屋を出て行った。
廊下を歩いていると、何人かのサーヴァントや職員にマシュのことを聞かれたので、事情を説明すると、皆一様に驚いていた。マシュの勤勉さは周知の事実であったため、五月病というものとイメージが大分遠かったらしい。
マシュの周りからのイメージを知ることができたことで、なんとなく立香は楽しくなった。今日は新しいマシュの姿を多く見ている気がしていた。
食堂に着くと中は多くのサーヴァントや職員でにぎわっていた。立香は彼らに軽く挨拶しながら奥へ進み、厨房へと向かう。
「エミヤ、朝ご飯頂戴」
「またずいぶんストレートな注文だな、マスター」
呆れたような笑みを浮かべるのは、アーチャーのサーヴァント、エミヤ。今の彼は黒いインナーの上にエプロンという出で立ちで、完全に主夫の体を成している。
そんな姿に、オカンという言葉が思い浮かぶがなんとか飲み込み、立香は話を続ける。
「ごめんごめん。それより、何か軽い朝食作ってくれないかな。二人分」
「いいだろう。二人分ということは君とマシュの分か？」
「あれ、知ってたの？」
少し驚きながら立香が言う。当然とばかりにエミヤは頷き。
「ダヴィンチ女史から事情は聞いている。きっとそういう注文をするだろうと思ってすでに用意していたよ」
そう言うと、エミヤはお盆に乗った朝食を二つ、立香に向けて差し出した。
「白飯と焼き魚、それにお手製の漬物だ。朝に手早く済ませるならちょうどいいだろう」
「ありがとう」
あまりの手際の良さに再びオカンと言いそうになるのをこらえながら、立香は礼を言う。

お盆から料理を落とさないように気を付けながら、立香は廊下を歩く。部屋の前に着くと、器用にカードキーを取りだし、ドアを開ける。
「お待たせマシュ。ご飯貰ってきたよ」
「むにゃ……ありがとうございます。先輩」
どうやら再びベッドに横になっていたらしいマシュは、目をこすりながら体を起こす。
立香はその様子に苦笑しながらも、テーブルの上にお盆を置き、近くにあった椅子に腰かける。
「さあ、冷めないうちに食べちゃおう」
「そうですね。……むっ」
箸を取ろうとしたマシュだったが、何やら悩むような素振りを見せると手を止めてしまう。何事かと立香が首をかしげていると。
「先輩、ご飯食べさせてください」
「……はあ？」
突然の頼みに立香も思わず変な声を出す。マシュは気にせず続ける。
「なんだか、ご飯を食べるために体を動かすのも億劫に感じてきました。だから先輩に食べさせてほしいんです」
「……それはさすがにダメじゃない？」
マシュの言葉に、立香は難色を示した。
いくら五月病で体を動かすのが億劫でも、食事すら他人に頼るのはどうかと思うからだ。
しかしマシュは、いやいやと首を振り。
「お願いします。食べさせてもらえないと何もできません」
「う～ん」
立香は眉を寄せて悩む素振りを見せる。
本来ならこのようなことをするべきではないというのは分かっている。しかし、マシュに食べさせるというシチュに心が惹かれる自分もいた。
どうするかと思い、マシュに視線を戻すと、潤んだ瞳でこちらを見つめていた。その視線はズルいなぁと立香は思いながら。

「分かったよ。食べさせてあげるよ」
結局、立香は誘惑に負けて承諾した。マシュのお盆に乗っている茶碗と箸を手に取り、軽く白飯をつまみ、マシュの目の前へと持っていく。
「はい、あーん」
なんでもないように、しかし内心では心臓が早鐘を打ちながら、立香は口を開けるように促す。
マシュの方はというと、面喰らったように顔を赤く染めるが、すぐに目を閉じ口を開ける。
瑞々しくハリがある唇の動きに目を奪われながらも、その気持ちを押し殺しながら立香は箸を動かす。少しずつ、少しずつ、箸が進み、やがてマシュの口内にたどり着く。
ゆっくりと箸を開き、白米を舌の上に置くと、マシュは口を閉じ噛みしめるように咀嚼する。その口の動きに艶めかしさを感じて、立香は顔をそむけた。
しばらくお互い無言のまま、マシュの口が動く音だけが聞こえていた。やがてマシュが飲み込むと目を開けて、立香を見る。
「……やっぱり普通に食べます」
「……そうだね」
結局、マシュは自分で食事をすることにし、立香も黙々と食事を続けた。
お互いの食器が空になるまで、二人とも無言であった。
★
食事が終わり、食器を食堂に返した後、二人は部屋で過ごしていた。特に会話もなく、漠然と時間を過ごす。先ほどの行為が未だに尾を引いていた。
しばらくして、マシュがうつらうつらと船を漕ぎだした。それを見て立香は部屋を出ることにした。
「俺は部屋に帰るよ。マシュはまた眠いんだろう？　ゆっくりお休み」
「はい……そうします……」

ベッドに転がり、布団をかぶるマシュ。立香は立ち上がり部屋を出ようとする。が、裾をマシュにつかまれ動きを止める。
「どうしたの、マシュ？」
「先輩、少しこちらに近づいてくれませんか？」
「え？　いいけど」
マシュの言う通り、立香はしゃがみ寝そべるマシュの近くに身体を寄せる。
その瞬間、マシュは目にも止まらぬ速さで動き、立香の身体を抱き寄せ拘束する。突然のことに立香は全く反応できず、なすがままになる。
「ま、マシュ……!?」
「すみません、このまま、抱き枕代わりに……」
言い終わると同時に、マシュは寝息を立て始める。しかし拘束は緩まず、ガッチリと固まったままだ。
対する立香はパニックになっていた。ただでさえマシュに抱きしめられるというだけでも心臓が早鐘を打つというのに、今立香の目の前には、マシュの豊満な二つの果実があった。衣服越しでもしっかりと柔らかさを感じさせる胸部に、立香は目を奪われていた。
「ま、マシュ……！　放して……！」
「スウゥ～……スウゥ～……」
マシュを振り解こうとしながら、懸命に呼びかけるが全く反応しない。むしろ拘束が強くなり、顔が胸に押し当てられる。
「ん～!?　んん～!?」
予想外のことの連発で、立香の頭は真っ白になる。とにかく抜け出ようともがくが、口を押さえられ呼吸もし辛くなる。
やがて、脱出を諦め立香は抵抗をやめる。そのまま目を閉じ、自分も眠りに甘んじることにしたのだ。
（まあ……たまにはこういうのも……悪くないか……）
意識を失う直前、そんなことを思いながら、立香は眠りにつくのであった。

マシュ／水着ガチャ

「うわあああああああああ!!!」
カルデア中に響き渡るほどの絶叫。それは召喚室から発生していた。
召喚室の床に這いつくばるのは、人類最後のマスター、藤丸立香（ふじまるりつか）。金色の札と虹色に輝く石を握りしめて、ひたすら床を叩いていた。
「先輩、もうやめた方がいいですよ……？」
そんな立香を心配する素振りを見せるのは、立香の後輩にしてパートナーである、マシュ・キリエライトだ。
彼女は、床に這いつくばる立香に対して、同情とも憐みとも言えない表情を向けていた。
「いくら回しても、お目当てのサーヴァントが来ないのが辛いのは分かりますが、これ以上召喚を続ければ、さすがに今後に影響が出ると思われます」
マシュは優しく諭すような口調で、語り掛ける。普段の立香ならば、マシュの言葉を聞き入れ、身を引いていただろう。しかし。
「いや、今回ばかりは諦められない……なんたって水着のサーヴァントなんだから！」
立ち上がると共にそうやった叫ぶ、立香。マシュはなんともいえないような表情で沈黙していた。
そう。今のカルデア召喚システムでは、特殊な霊基に変化した水着サーヴァントが召喚できるようになっていた。
この機会を逃せば、次にいつ、水着サーヴァントを召喚できるか分からないため、立香も普段以上に召喚に気合を持ち合わせていた。
「でも、先輩は今回の召喚では、あまりいい結果を残せなかったじゃないですか。これ以上続けても、無駄のように思いますが……」
「それを言わないでー！」
突きつけられた現実に、立香は頭を抱えて、再び床に這いつくばった。
水着が召喚できると言っても、他のサーヴァントが出てこないわけ

ではない。まれに普段から召喚できるサーヴァントがすり抜けて召喚されることもあるのだ。
そして立香も、つい最近それを味わったばかりであった。
「確かに、ベオウルフさんが来たよ……バーサーカーが出た時は、ノッブかと期待したんだけどね……」
ベオウルフとは、バーサーカーのサーヴァントの一人で、かつてはアメリカで立香達と戦った男だ。
今回の召喚で、ピックアップをすり抜けてカルデアにやってきたのであった。
「なんだ、俺じゃ不満だったか？」
自分の名が呼ばれたことで、ベオウルフ本人が反応して、姿を見せた。立香は首を勢いよく振り。
「いやいや、ベオさんは悪くないんです。むしろ来てもらって嬉しいですよ」
「そうかい。まあ、何かあったら力貸すぜ」
そう言ってベオウルフは大きく笑う。釣られて立香も笑うが、乾いた笑みであった。
「いや、運が無い理由はベオさんじゃなくて、アイツのせいだから……」
「イヤだな～。召喚したのはそっちじゃないか」
うなだれる立香の呟きに反応したのは、全身が真っ黒な闇に覆われた男であった。唯一まともに見える瞳を愉快そうに歪めて、立香の前に現れた。
「アンリマユ。本当お前なんで来たんだよ……おかげで運が吸われてしまったじゃないか……」
全身真っ黒くろすけの名前は、アンリマユ。この世全ての悪、という役割を押し付けられた少年のようなものだ。
本来ならカルデアのシステムでも召喚することは難しいはずだが、ひょんなことから召喚に成功し、カルデア所属となった。
しかも、水着サーヴァントの召喚前に。
「本当、なんでお前なんだ……俺だって水着の女の子とイチャイチャ

したかったぞ……」
「まあ、しょうがないじゃん？　呼ばれっちまったもんは仕方ない。それよりオレも育ててくれよ、全然種火くれないじゃん」
「よく分からんタイミングで来たような奴に、食わせる種火はねえ」
「酷い!?」
　二人の会話が盛り上がってきたところで、マシュが口をはさむ。
「先輩、もう石も呼符も使い切りました。これ以上の召喚は不可能です」
「そうなんだよ……絶対アンリマユに運吸われたよな……」
　そう。
　すでに立香は、聖晶石２１０個、呼符２０枚強というそこそこの大勝負に出ていた。その結果は、大惨敗。目的の水着サーヴァントは一人として来なかったのであった。
「もう今回は諦めるしかないのかな……水着オルタと水着ネロに来てほしかった……」
　現実を思い出し、再び床にうなだれる立香。そんな彼を見て、アンリマユは嗤う。
「そんなこと言ってさ。去年の水着ちゃんはそこそこ持ってるんだろ？」
「玉藻とか清姫達のこと？　いやまあ、そうなんだけどさ……」
　今年の水着サーヴァント召喚の前に、去年の水着サーヴァント達も召喚のチャンスがあった。立香はそれにも挑戦し、それなりの成果を挙げていた。
　玉藻の前。清姫、マリー・アントワネット、アルトリア・ペンドラゴン。そしてスカサハ。
　この５人のサーヴァントの水着姿を召喚に成功し、カルデアの戦力も大幅に強化されていた。
「アンリといい、玉藻達といい、嬉しいような悲しいような……いや、嬉しいんだけど、なんだかなぁ」
「あらあら。ますたぁは仕方のない人ですね」
「うっ……!?」

「先輩!?」
突如、立香の背後に這い寄る影が一つ。するりするりと、蛇のように立香の身体に絡みつき、彼の顔に自らの顔を近付ける。
「旦那様。あのような破廉恥な女達などより、私がいれば充分でございましょう?」
「き、清姫……」
竜のような角を持ち、蛇のような白い肌、年齢の割には育っている胸部を持つ英霊ーー清姫。
夏の装いとして、水着と薙刀を身に着け、本来の愛に狂った少女から中身はまるで変わらない槍兵へと、クラスチェンジした姿で現界した彼女は、立香の物言いに不満があるのかシューシューと喉を鳴らす。
「あのような、際どい水着でますたぁを誘惑するポンコツ巨乳皇帝と、奉仕のほの字も知らないような貧乳暴君など、必要ございません。私という妻がありながら、現を抜かすのは許しませんよ?」
「痛い痛い痛いぃ!? 清姫、爪食い込んでるから!!」
清姫は恋に生き、恋に死んだ英霊。かつて恋をした男を立香に重ね、立香のことも愛している。
そのため、立香が他の女性サーヴァントなどと仲良くしていたり、強い思いを抱いていたりすると、こうして嫉妬を燃え上がらせ、迫ってくるのである。立香も毎度、慣れっこであった。
「わ、悪かったよ、清姫達が頼りにならないわけじゃないんだ! ただ、やっぱり魅力的に思えるわけなんだよ、俺も男だし……」
「殿方が美しい女性に目を奪われるのは理解できます。でも、それと嫉妬してしまうのは、話が別ですのよ?」
「熱い熱い!? 火! 火出てるから!」
「おいおい、清姫の嬢ちゃん、やりすぎだぞ」
「清姫ちゃん、ストップ、ストッププリーズ!」
清姫が口から火を出し始めたのを見て、周囲にいたサーヴァント達もさすがに止めに入る。
そんな喧噪を、マシュは一歩引いたところで眺めていた。その胸に

は、言いようのない悲しみのようなものが芽生えていた。
「あら、どうしたの？　マシュ」
「マリーさん」
　マシュに声をかけたのは、白いワンピースを身に纏い、ビーチボールを持った少女ーーマリー・アントワネットであった。
　マリーは太陽のように輝かく笑みを見て、マシュは口を開く。
「なんなんでしょう。先輩が水着サーヴァントの皆さんを求めているのを見ていると、なんだか心がチクチクするような……戦力が大事だということも、男性がそういったものを求めるのも分かるんです。それでもなにか……」
「ふんふん。なんだ、とっても簡単のことじゃない」
「そうなんですか？」
　得心いったように頷くマリー。対するマシュは、マリーの言うことの意味が分からず首をかしげる。
「あなた、嫉妬を感じているのでしょう？　マスターがあなた以外の人に、デレデレしているから」
「嫉妬……ですか？」
　その言葉を受けても、マシュにはピンとこなかった。
　嫉妬というのは、人間誰しもが持っているであろう感情。他人の行いや態度を妬ましく思うことである。今の清姫の原動力も、嫉妬である。
　だがマシュには、それがいまいち分からなかった。
　確かにこれまでも、立香が他の女性と仲良くしているのを見て、心が落ち着かないことが何度もあった。だがそれは、嫉妬と呼べるかも分からない小さな疼きだったのだ。
　心の小さな疼きを明言出来るほど、マシュに人生経験はなかった。
「果たして、本当に嫉妬なのでしょうか。私には……分かりません……」
　マシュは、なんとなく自分が周りより劣っているように感じて、俯（うつむ）いてしまう。
　そんな彼女の姿を見て、マリーは不思議そうに言う。

「そんなことないわ。嫉妬に大きいも小さいも関係ないわよ」
「そうでしょうか？　でも、清姫さんは……」
「あの人は、想いが人より強すぎるもの。普通の人なら抑える感情を、抑えられないだけなのよ」
　そこで一呼吸置いて、マリーはさらに続ける。
「マシュ。あなたの周りにいるのは、一人を除いて皆一度人生を終えた者たちよ。まだ成長するあなたと違って、私たちは様々な経験を通じて、色んな感情も学んできた。そんな人達と比べて、気負うことなんてする必要ないのよ？」
　その言葉に、マシュは気付いた。
　自分の周りにいる英霊達は、自分以上に多くのものを見て、感情を学んできた。未だ未熟な自分とは、最初から土台が違うのだから、比べる意味などなかったのだ。
「大切な人が自分以外の何かに目を向けていれば、悔しいと思うのは当然のことよ。嫉妬は悪い事じゃない。人間が生きていく上で、大切な感情なの。現に清姫さんだって、嫉妬のおかげであんなに積極的でしょう？」
　そう言ってマリーが目線を向けた先には、立香を脱がそうとして、結局サーヴァント達に抑えられた清姫がいた。確かに今の清姫の原動力は、嫉妬にあると言える。
「むしろあなたは、感情を押さえようとするからダメなのよ？　マスターは鈍感なんだから、あれぐらい積極的じゃないと、気付いてくれないわ」
「そ、そうでしょうか……」
　ストレートにダメ出しされ、マシュは少したじろぐ。
　立香に要らぬ負担を与えないように、気を付けていたつもりのマシュにとって、痛い言葉であった。
　するとマリーは、何か良いことを思いついたような表情を浮かべ、近づいてくる。マシュは嫌な予感を薄っすらと感じていた。
「だからね？　この際、もっと積極的にマスターにアタックしちゃいましょう？」

「……はい？」
　ニッコリと、良い笑顔でのたまうマリー。対するマシュは、一瞬キョトンとしてから、真意を問いただす。
「ええと、どういう意味でしょうか……？」
「マスターは今、他の水着の子にお熱なんでしょ？　こんなに可愛い後輩がいるのに」
「は、はい……」
「だから、あなた自身がマスターにアタックして、分からせてあげるのよ。マスターの隣には常に、こんなに魅力的な子がいるんだってね」
「誘惑しろ……ということですか？」
「そういうこと」
　そう言うとマリーは、マシュの手を引き召喚室を出る。
　マシュはどこへ連れて行かれるのか分からなかったが、黙ってされるがままにしていた。
　やがてマリーが足を止めたのは、彼女自身の部屋の前だった。
　マリーは部屋に入ると、クローゼットの中を漁りだす。
「ええと、確かこの辺りにーーあ、あったわ！」
　マリーが取り出した物を見たマシュは、目を見開き、驚きを露わにする。
「な……それは……！」
「ええ、私が頼んで、用意してもらったの。せっかくだから、あなたにあげるわ」
「ま、待ってください！　いくらなんでもそれは……」
「マスターを元気にしたいでしょう？　これを使えば、元気にならない人なんていないわ」
　笑顔で迫ってくるマリーに、気圧され反抗できないマシュであった。
　☆
　所変わってマスターである立香の部屋。
　召喚室から出た立香は、失意の内に部屋に戻っていた。
「清姫もやりすぎだけど、俺もちょっと落ち込みすぎたかな。皆に迷

惑かけちゃったか」
ベッドに転がり、そう一人ごちる。
召喚に失敗した。だが、今のカルデアには充分な戦力が揃っている。望みの英霊一人を召喚できなかったからと言って、落ち込みすぎる必要はない。
そう考えて、気持ちを切り替える立香。いつまでも落ち込んでいては、周りに示しがつかない。
とりあえず、シャワーでも浴びようかと思い、立ち上がったところで部屋をノックする音が聞こえてくる。
「先輩、今いいですか？」
「マシュ？　別にいいよ」
立香はロックを解除し、扉を開ける。目の前に立っていたのはマシュであった。
しかし、その恰好は普段とは大分違う。
何故か白い大きなシーツのようなもので全身を覆っており、着ている服は見えない。さらに表情は、緊張したように強張っており、まるで特異点に挑む時のような雰囲気であった。
「どうしたのマシュ？　具合でも悪いの？」
「い、いえ、そういうわけでは……とにかく、失礼します！」
何かから逃げるように、マシュは部屋の中に入ってくる。軽く押しのけられた立香は、首をかしげてベッドに座る。
「せ、先輩……その、先輩は水着がお好みなのですか？」
「え？」
唐突な質問に、立香は一瞬思考を止める。
何故マシュがそのような質問をしたのか、その理由はたった一つしかない。
ならば、正直な思いを告白しなければなるまい。立香はそう考えた。
「確かに魅力的だとは思うよ。正直、惹かれるものがある」
「そうですか……」
「うん、普段より露出多いし、その、中々発育が良い人もいるし、男と

して好みではあります。はい」
自分が取り乱したことでマシュに余計な不安を与えてしまった、だから正直に思ったことを言ってみる。
最善かと思って取った行動だが、冷静になるとただ単に性癖を暴露しただけになってしまった。言い終わってから、立香は選択を誤ったことに気付く。
何か別の弁解をしなければ、と思考する立香はチラリとマシュの方を見る。
マシュは俯いて何かに耐えるように拳を握っていた。顔も少し赤らめ、全身がプルプルと震えている。
「ま、マシュ？　大丈夫か？」
思わず心配になって聞く立香。しかし、マシュはそれに答えず、立ち上がる。
「せ、先輩！　その、軽蔑しないでくださいね……？」
「へ？」
軽蔑なんてするわけない、そう言おうとしたが、その言葉が口から出ることはなかった。
マシュはいきなり、羽織っていたシーツを思い切り脱ぎ捨てた。露わになったマシュの恰好は、いつもの服装ではなかった。
赤と白のツートンカラー、胸の大事な部分のみを隠すような際どいデザイン。ローマ皇帝ネロ・クラウディウスが着用していた水着、それと同じものをマシュは身に着けていたのだ。
予想外の展開に、立香の頭は真っ白になる。
何故マシュがネロと同じ水着を着ているのか？　マシュの美しい肉体に、過激な水着はベストマッチすぎるのではないか？　というか、水着で部屋まで来たのか？
様々な疑問が頭の中を駆け巡り、どう対処すればいいのか分からない。そんな彼にマシュは顔を真っ赤にして、答える。
「こ、これは……先輩を励ますために、マリーさんが、『あなたが同じ水着を着ればいいんじゃない？』とおっしゃって……断ったんですけど、他の方々も面白がって……あれよあれよと、ネロさんと同じ水着

を着せられてしまって……」
「な、なるほど……」
「ちなみに、水着オルタさんのものも、渡されました……」
消え入りそうな声でマシュは語る。彼女を慰めるべきか似合っていると褒めるべきか。立香は頭をフル回転させて、この状況を打破する方法を考える。
そんなことを考えているあいだに、マシュはヘアゴムのようなものを取り出す。髪を少し束ねて、ゴムでまとめる。それを二つ作って、口を開く。
「ね……ネロであるぞよ～……なんちゃって……」
いわゆるツインテールと呼ばれる髪型を作り、茹で上がったように真っ赤な顔をするマシュ。水着ネロと同じ水着、同じ髪型をすることを、マリーに勧められていたのだ。
マシュは羞恥のあまり今にも倒れてしまいそうだった。ここまで露出が多く、今までしたことのない髪型をしたことで、立香に軽蔑されてしまわないかという不安もあった。立香はどういう反応をしているかをチラリと見る。
立香は硬直していた。マシュの姿を見ているようで見ていない。呆けた表情をして止まっていた。
「せ、先輩……？　大丈夫ですか……？」
恐る恐る声をかけるマシュ。もしかして、彼は全く気に入らなかったのだろうかーー。
そんな不安を覚えていると、立香が立ち上がり、マシュの目の前まで歩いてくる。その顔は影になっていて、表情は伺いしれない。
「あ、あの、先輩……？　どうなさって……あの、何故、手を引っ張るんですか？　何故ベッドを目指すんですか……？　先輩？　先輩……!?」
マシュの呼びかけにも答えず、立香はマシュを引きずっていく。
このあと、どうなったかは二人のみぞ知る。

ジャンヌ・オルタ／愛とは何か

「今だオルタ、宝具を！」
「ええ」
　魔力を送りながらの命令を受けて、ジャンヌ・オルタは剣を抜く。溢れんばかりの魔力が炎へ変換され、敵に向かって放たれる。
「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮ーー『吼え立てよ、我が憤怒（ラ・グロントメント・デュ・ヘイン）』!!」
　敵の足元から吹き上がる炎。それは一切の不正、汚濁、独善を焼き尽くす怨念の業火。さらに追い打ちをかけるのは、かつて聖女の命を奪った串刺し。それに包み込まれた相手は、断末魔をあげる暇もなく灰となり、消滅した。
　敵の消失を確認し、マスターである藤丸立香（ふじまるりつか）は息を吐く。何度もやってきた戦闘だが、その時その時で状況は変わるので、一瞬も油断できない。緊張が張り詰めていたのをようやく解くことができたので、立香は息を吐いたのだ。
「お疲れ様ジャンヌ、ケガはない？」
　立香はジャンヌ・オルタへと駆け寄り、声をかける。対するジャンヌ・オルタは小馬鹿にしたように笑い。
「当たり前です。それとも何？　私がこの程度で傷付くとでも？」
　相手を見下し、蔑むような顔でジャンヌ・オルタは言う。
　そのような顔を向けられても、立香は嫌な顔をせず、むしろ申し訳なさそうな表情になる。
「ごめん、ジャンヌを信頼してないわけじゃないんだ。ただ心配だったから」
　それを聞いて、ジャンヌ・オルタは軽く吹き出す。それから右手を持ち上げ。
「ハン、人の心配より、自分の心配しなさいよ。人類最後のマスターちゃん」
「いてっ」
　ジャンヌ・オルタは、立香の額にデコピンをくらわせ嗤う。そのま

ま立香を置いて、歩き始める。
打たれた額を押さえて、立香もその後を追いかける。
すぐに隣に並ぶと、ジャンヌ・オルタに合わせて歩いていく。
「今日の晩飯何かなぁ」
「さあね。アンタの好きなものなんじゃない」
「そうかな。だったら一緒に食べようか」
「……好きにしなさい」
これが二人の日常。
一見歪に見える、藤丸立香とジャンヌ・ダルク・オルタの関係である。

★

カルデアのジャンヌ・オルタの自室。
レイシフトから帰還し、休息を取るためにサーヴァント達一人ひとりに割り振られている部屋を、彼女も使っていた。
普段の戦闘で着込んでいる鎧や服は脱ぎ、ラフな黒シャツとショートパンツといった格好で、ベッドに腰かけて雑誌を読んでいる姿は、まさに普通の少女という形で、とても復讐の魔女とは思えないほどだ。
「フン、相変わらずつまらない内容ばかりね。よくもまあ、飽きもせずにこんなものを作れるわ」
そう吐き捨てるジャンヌ・オルタ。彼女が読んでいる雑誌は、カルデア内のサーヴァント達によって暇つぶし目的で発行されているものだ。毎週毎週、無料で配布されるそれは、絶大な人気を誇っていた。
現に口では悪く言うジャンヌ・オルタも、毎週かかさず読んでいる。
「まあ、このファッションコーナーは、悪くないわね」
雑誌の中には女性サーヴァントによるオシャレファッションコーナーがあり、女性スタッフから絶大な人気を得ている。ジャンヌ・オルタも愛読しており、今まで貰った雑誌の全てのファッションコーナーに、付箋を大量に貼っているほどだ。
「それにしても、お腹空いてきたわね。何か食べに行こうかしら」
ジャンヌ・オルタは雑誌をベッドに置き、部屋を出る。

食堂へ向かって歩いていく途中、何人かのスタッフ達とすれ違った。皆、一様にしてジャンヌ・オルタと目を合わせないようにして去っていく。
ジャンヌ・オルタは軽くため息を吐き、その光景を眺めていた。彼女自身の性格上、スタッフだろうとサーヴァントだろうと、上から目線のキツイ口調は変わらない。そのため、一部のスタッフからは未だに恐れられているのだ。
「まあ、別に嫌われたからといって、どうということはありませんが……」
そう、誰にも聞かれないようにつぶやく。
やがて食堂に着くと、出来るだけ端の人の少ない場所を選ぶ。他人と深く関わることを良しとしないジャンヌ・オルタにとっては、食事の席を決めるのも一苦労であった。
手元にあるメニューを開くと、適当にページをめくっていく。やがて目についたものを選ぶと、注文のためにカウンターへと向かう。
「ちょっと。『シェフの気まぐれランチ』と『世界樹の種の胡麻和え』を一つずつ頂戴」
「あいや分かった。しばし待たれよ、グレた聖女よ」
「誰がグレたのよ！」
キッチン係としてオーダーを取るタマモキャットの言葉に思わずツッコむ。しかしキャットは笑うだけで、怒りも意味をなさない。仕方なくそれ以上の言及はやめ、ジャンヌ・オルタは席に戻ることにした。
待っている間、ぼんやりと周囲の光景を眺める。
様々な時代から呼び出された英霊達が、思い思いに騒ぐ様子は異常ではあるが、カルデアでは当たり前のこと。人理を救うという目的のために集まった彼らは、実に楽しそうにしていた。
「能天気なものね、相変わらず。あれで英霊なんて笑わせます」
「『笑いを忘れた者は楽園でも笑えなくなる』。そう言う奴もいるがな」
「ん？」

独り言に反応する声を聞き、ジャンヌ・オルタは隣を見る。
そこには翠緑の衣装を纏った少女、アタランテが立っていた。アタランテはクールな微笑を浮かべて、話しかける。
「こんな隅で一人で食事か。相変わらず、不器用な女だな。汝は」
「余計なお世話よ。あんたこそ、こんなところになんの用ですか？ まさか、一緒に食べる相手がいなくて、私のところに来たわけじゃないでしょうね」
ニヤリと嗤いながら、ジャンヌ・オルタは言う。相手を馬鹿にして、見下すような表情だ。
アタランテはそれに気分を害した様子もなく、少しだけ肩をすくめる。
「なに。寂しくないのかと不思議に思っただけさ」
「それこそ余計なお世話。復讐の魔女に、寂しいなんて感情はありません。むしろ近くにいると呪われますよ？ それが嫌なら、さっさと離れることね」
意地悪く言うジャンヌ・オルタ。それを見て、アタランテはやれやれというような、苦笑を浮かべる。
「何よ、何か言いたいことでもあるわけ？」
「別に、少し伝言があっただけだ」
その言葉に、ジャンヌ・オルタは眉を歪める。
「伝言？」
「ああ。マスターからの伝言だ。今日は一日オフだから、ゆっくりしてくれ、とな。最近まで忙しく戦闘に出ていたのだろう？ この機にゆっくりすると良い」
そう言うと、アタランテはテーブルから離れ、去って行った。ジャンヌ・オルタはその背中を眺めて、呟く。
「まるで私を子供みたいに扱いますね、あの人は」
彼女のことは苦手だと、ジャンヌ・オルタは改めて思った。
★
一日オフとなったジャンヌ・オルタは、カルデアの中を散策していた。部屋に戻っても特にすることもなく、時間を持て余すだけ。なら

ば、身体を動かした方が良いと判断したためだ。
　あてもなくカルデア内をさまよい、適当に足を進める。
「あれ、ジャンヌじゃん。ヤッホー！」
　突然、前方からやって来た誰かに声をかけられ、ジャンヌ・オルタは足を止める。
　声をかけてきたのは、狐耳を生やし、女子高生の制服に和服を混ぜたような独特な衣装を纏った少女、鈴鹿御前だった。
　鈴鹿御前の姿を視界に収めると、ジャンヌ・オルタは顔をしかめる。いわゆるＪＫという風な彼女の雰囲気を、ジャンヌ・オルタは苦手としていた。
「ねえねえ、何してんの？　珍しいよね一人でこんなところまで来るの。なんか用事？　それとも嫌なことでもあった？　良ければ話くらい聞くし。あ、そういえばメイクとか興味ある？　時間あるならちょっとお話しようよ」
　矢継ぎ早に放たれる言葉に、ジャンヌ・オルタは後ずさる。
　飲まれてたまるかと、なんとか手で制し、鈴鹿御前の言葉を止める。そして、相手を軽く睨みつけて、口を開く。
「相変わらず、バカみたいに口が働きますね。舌を抜いてやれば、少しは収まるのかしら？」
「え～？　そんなこと言わないでよ～アタシはジャンヌと仲良くしたいだけだし～」
「私はあまり仲良くしたくはないのですが……」
　呆れた声音でジャンヌ・オルタが言う。
　しかし、鈴鹿御前は諦めない。いきなりジャンヌ・オルタの腕をつかむと、勢いよく引っ張っていく。
「見た感じ暇でしょ？　暇だよね！　だから、ちょっと付き合ってよ！」
「ちょ、離しなさい！　って、力強いわねアンタ！」
　抵抗するも成す術もなく引きずられるジャンヌ・オルタ。
　筋力Ｄと筋力Ａ（ジャンヌ・オルタ）。単純なステータスでは測れない力量差が、あるようだ。

ジャンヌ・オルタを引きずる鈴鹿御前。やがて、自らの部屋の前で足を止める。だが、掴んだ腕は離さない。
扉を開けて、中に入ると、すでに何人かのサーヴァントが集まっていた。
フランスの王妃、マリー・アントワネット。
白百合の騎士、シュヴァリエ・デオン。
そして自由の獣、タマモ・キャット。
意外な面子に、ジャンヌ・オルタは首を傾げた。
「なんで、ＪＫの部屋にアンタ達がいるわけ？」
すると、テーブルでクッキーをつまんでいたマリーが答える。
「私達は鈴鹿さんから、お茶会に誘われたのよ。あなたもそうではなくて？　黒いジャンヌ」
「いや、私は無理やり連れて込まれたというか……」
「マリーちゃん、せいか～い！　暇そうにしてたのを誘ってきました！」
「だからアンタが無理やり連れて来たんでしょう!?」
テンション高めで叫ぶ鈴鹿御前に対し、ジャンヌ・オルタはツッコむ。
その光景を見ていたデオンが、見かねて声をかける。
「私達もいきなり呼ばれてね。まあ、お茶会だと思って、少しだけ付き合ってくれないか」
「嫌ですよ。なんで私がお茶会なんか……」
そう言って、部屋を出ようとするジャンヌ・オルタ。しかし、鈴鹿御前に服を掴まれ、足を止められる。
「まあまあ、そう言わずにさ。せっかく来たんだし、ちょっとくらい付き合ってよ！」
「だから、なんでそんなに力強いのよアンタは！」
結局、なすすべもなく椅子に座らされるジャンヌ・オルタ。目の前で流れるような動作で、紅茶が淹れられるのを、黙って見ているしかなかった。
「ハァ……わかりました。少しくらいなら付き合ってあげます。で

も、竜の魔女をお茶会に誘って、不幸が起こっても知らないわよ」
「うし！　さすがジャンヌ、話が分かるね！　色々お話、聞かせてよ！」
「まあ、黒いジャンヌのお話！　私も聞きたいわ！」
　楽しそうに目を輝かせる鈴鹿御前とマリーに、ジャンヌ・オルタは少し引いた。楽しい話など、一つもできる気がしない。
「グレた聖女は、ツンデレというやつだから、簡単には話してくれないワン。まずは色々、こちらから話すべきではないか？」
「っと、それもそうね」
　先程からお菓子を食べるために黙っていたタマモキャットが言うと、鈴鹿御前はきちんと座り直し、紅茶を淹れる。
「じゃあ、何から話そっか。メイクの話とか？　マリーの肌って本当綺麗だよね～なんかメイクとかしてるの？」
「ウフフ、私はほんの少し、たしなむ程度よ。デオンはどう？」
「い、いや、私はそういったことは……」
「ふむ、キャットは野生、そのような服飾さんは、ごめんなのだな」
　各々が好き勝手に会話を盛り上げていく。その様を見てジャンヌ・オルタは思う。
「これ、お茶会というより、井戸端会議ってやつなんじゃ……」

★

　あらかたの話題を振られても、ジャンヌ・オルタは興味がない、と切り捨て続けた。そろそろ撤収しようと思い、紅茶を飲み干すためにカップを持ち上げる。
　その時、鋭い刃が彼女を貫くことになる。
「ジャンヌはさ、好きな人とかいないの？」
　鈴鹿御前の問いに、カップを持ち上げていた腕を止める。
　動揺したわけではない。単にくだらない問いだと思ったからだ。
「いません。復讐者は恨みこそすれ、好きになることはありません」
　呆れた声でジャンヌ・オルタは言う。そのまま、紅茶のカップを持ち上げ、飲み干そうとする。
「ええ～？　でもジャンヌ、マスターのこと好きでしょ？」

「ブフッ!?」
今度こそ、大いに動揺し口の中の紅茶を吹き出した。せめてもの意地で下に向かって吐き出したが、おかげで服はびしょ濡れになった。
「だ、大丈夫か?」
「思ったより動揺していたな。実に分かりやすい」
デオンが素早くタオルを持ってきて手渡し、タマモキャットは腕を組んで、何かに納得したように頷く。
受け取ったタオルで体を拭きながら、ジャンヌ・オルタは鈴鹿御前を睨みつけた。
「なにを、なにを馬鹿な事を言ってるんですか！　私がアイツを好きになるわけないでしょ！」
「いや、思い切り動揺してるじゃん」
「これは、あなたが馬鹿なことを言うから、可笑しかっただけです！」
顔を赤く染め、必死に言い訳をするジャンヌ・オルタ。その様子を見て、鈴鹿御前は意地悪く笑う。
「いや、その反応は脈アリっしょ。どの程度であれ、ジャンヌはマスターのことを好きでいる、これは確定ね」
「まあ、あそこまで分かりやすく動揺されればな……」
鈴鹿御前の追及に、デオンも同意する。
ジワジワと追い詰められ始めたジャンヌ・オルタは、口をパクパクと開き、なんとか言い訳をしようとする。
だがその前に、最後の一人が口を開いた。
「黒いジャンヌはマスターのことが好きなのね。それってとても素敵だわ！」
輝くような笑顔で言い放ったのは、今まで沈黙を保っていたマリーだった。
優雅な仕草で両手を合わせ、嬉しそうに笑う彼女に、全員の視線が集まった。
「何が……素敵だって言うのですか」
「あなたは誰かを好きになること、愛を知ったのよ。それは、復讐以外の糧を見つけられたという事ではなくて？」

「そんなこと……あってはなりません！」
ジャンヌ・オルタは、微かな怒りを露わにしてマリーを睨みつける。
復讐者（アヴェンジャー）として現界したジャンヌ・オルタにとって、復讐こそが生きる糧であり、存在理由だ。それ以外のものなど例え手に入れたとしても、塵芥（ちりあくた）のように消え去るのみ。
そんな彼女に対し、マリーは復讐以外の生きる糧を得た、などと言う。
その言葉は、ジャンヌ・オルタにとって大いなる侮辱であった。
「お気楽お姫様が……人をおちょくるのがお得意なようですね？」
少しずつ増大していく魔力。デオンはマリーをかばうように立ち、鈴鹿御前とキャットもさりげなく身構える。
しかし、マリーは三人を手で制し、真っ直ぐジャンヌ・オルタを見つめる。
「あなたは、復讐のためだけに生まれたと言ったわね。でもそれは違うわよ。例えサーヴァントでも、造られた存在でも、誰かを愛することは間違いなんかじゃない。復讐者でも、人の心を持ったっていいのよ」
「だから、私はアイツのことなんか、好きじゃないって……」
「それは違う」
強い口調でマリーは断言する。
思わぬ行動に、その場にいる全員が息を呑んだ。
「なら、なんであなたは、彼の召喚に応じたのかしら？」
「……それは」
ジャンヌ・オルタは反論せず、押し黙った。
復讐者である彼女が、なぜ今カルデアに存在しているのか。その答えは、この場にいる全員が理解していた。
マリーは紅茶を一口飲むと、柔らかな笑顔を浮かべて、さらに続ける。
「もし、あなた自身にも分からないのであれば、マスターに会いに行ってみればいいんじゃないかしら。きっと、答えが出るはずよ」
「……誰がするもんですか」

そう言うと、ジャンヌ・オルタは立ち上がり、部屋を出て行った。
その背中を見送り、マリーはポツリと呟く。
「少し、やり過ぎてしまったかしら？」
「いや、あれくらいがちょうどいいでしょ」
テーブルの上に身体を倒しながら、鈴鹿御前が言う。
「自分でも自覚できてない恋心とか、どうしようもできないし。無理やりにでも目を向けさせるのが大事じゃん？」
そう言って、鈴鹿御前はクッキーをつまむ。その言葉にうなずくデオン。
「しかし、彼女が持っている感情が、果たして恋と言えるのでしょうか……」
デオンは不安そうに呟く。マリーも軽くうなずきながら。
「それは彼女が決めることね。私達は見守っていましょう」
そう言って、優雅に紅茶を飲むのだった。
★
「あり得ないあり得ないあり得ないあり得ない!!」
部屋を出たジャンヌ・オルタは、苛立った声を発しながら廊下を歩いていた。
先ほどマリーに言われたことが頭を離れない。自分がマスターである立香に恋をしている、などと。
「私が、よりによってあんな奴に！」
復讐者としての意地か、もしくは他の理由か。ジャンヌ・オルタはひたすら否定の言葉を吐き続ける。
ズカズカと前を見ずに進んでいると、曲がり角で誰かが飛び出してくるのに気付かず、ぶつかってしまう。
「っ痛ぅ、ちゃんと前を見て歩きなさいよ……」
文句を言おうと相手の顔を見た瞬間、ジャンヌ・オルタは硬直する。
ぶつかった相手は、今最も会いたくなかった存在、マスターである立香であったからだ。
立香も相手のことに気付いたらしく、笑顔を浮かべて話し出す。
「ああ、ジャンヌ。ちょうどいいところに。ちょっと話があるんだけ

どーー」
「は、話なんてないわよ！」
立香が何かを言いだす前に、ジャンヌ・オルタは走り出す。
今、立香の顔を見ていれば、取り返しのつかないことをしてしまいそうだったから。
「ええ!?　待ってよジャンヌ！」
当然、立香も追いかけてくる。サーヴァントとしての脚力を活かし、なんとか距離を離すが、数々の特異点で鍛えられた彼の体力も、負けてはいない。諦めずに追いすがってくる。
やがて、ジャンヌ・オルタは廊下の突き当りに行きあたってしまう。同時に立香も追い付いてくる。
「どうしたのさジャンヌ。なんで逃げるんだよ」
「なんでもいいでしょ。アンタの顔を見たくなかっただけよ」
「良くないよ。何か俺が気に障るようなことをしたなら、教えてほしい。謝るから」
「別にそんなことーー！　無いわよ。本当に何も」
一瞬、怒ってしまいそうになるが、なんとか抑える。自分勝手に怒ってしまえば、自分の中の何かを認めてしまいそうだから。
そんなことなど露知らず、立香はさらに詰め寄る。
「なんか変だよ？　気になることがあるなら、言ってくれよ」
「だから、何も無いって言ってるでしょ？　もう、放っておいてーー」
「ジャンヌ・オルタ！」
彼女本来の名前を呼びながら、立香は腕をつかむ。思わず身体を震わせるジャンヌ・オルタ。
立香は力強い瞳で、ジャンヌ・オルタを見つめる。
「頼む。何かあるなら教えてくれ。俺にできることならなんでもやる。君が悩んだり、苦しんだりしているのを見るのはーー嫌だ」
最後の方になるにつれて、言葉の覇気が無くなっていく立香。言ってる間に恥ずかしくなったのか、顔を少し赤くする。
ポカンとしていたジャンヌ。オルタも、その様子を見てプッと吹き出す。

「情けないわね。カッコつけたいなら最後までカッコつけなさいな」
「う、うるさいな。慣れてないんだ、こういうの」
立腹といった表情を浮かべる立香に、ジャンヌ・オルタは笑う。心底楽しそうに、愉快であることを隠さずに笑う。
それと同時に、ジャンヌ・オルタの胸中には一つの確信が生まれた。
ああ、きっと私は、この人のこういうところがーー。
「ああ、もう。なんだか悩んでるのが馬鹿らしくなってきたわ」
「あ、やっぱり悩んでたの？」
「ええ、まあね」
主にアンタのせいだけど、とは言わない。
笑っているうちに、鬱屈した気分が晴れたジャンヌ・オルタは、立香の顔を真っ直ぐ見つめる。
「マスター、一つ言いたいことがあるんだけど、良いかしら？」
「ああ、構わないよ。何？」
不思議そうに聞き返す立香。その顔に向かって、ジャンヌ・オルタはとびきりの笑顔で、言った。
「私ーーあなたのこと、好きよ。マスター」
それは今まで一度も言ったことのない、本当の、本心からの言葉だった。
最初、立香はポカンとしていた。少し遅れて、言葉の意味を理解したのか、一気に後ずさる。
「え、ええ!? す、好きってその、仲間として……？」
「違うわよ。いや、それもあるけど、それ以上に、異性としてーー人として好きだって、言ってるのよ」
自分の中でずっと燻(くすぶ)っていた感情。愛。
復讐者でありながら、そんなものを持っている自分は歪んでいるのだろう。当然だ。自分は一人の男の妄執が生み出した、歪な存在なのだから。
なればこそーーこうして一人の男に恋をしてしまったのも、必然であるのだろう。
なぜなら彼は、こんな歪な自分を一人の人間として、扱ってくれる

のだから。
　そう考えている間に、立香の方も精神を立て直したらしい。自らの頬を叩き、気合を入れなおしていた。
「そうか……ジャンヌ・オルタが俺のことを……なんだか嬉しいなぁ」
　笑顔を浮かべる立香だったが、何かを思い出し、ジャンヌ・オルタの手を引く。
「そうだった。渡すものがあるんだった。一緒に来てくれ」
「ちょっと、どこに行く気？」
　口ではそう言いながら、大人しくついていく。
　立香に手を引かれて辿り着いたのは、サーヴァントの強化を行う部屋だった。
「こんなところになんの用？　もう私に強化は必要ないでしょう？」
「実はね、これを渡したかったんだ」
　立香は部屋の奥に置いてあった何かを取り出し、ジャンヌ・オルタに見せる。それを見て、ジャンヌ・オルタは目を見開いた。
　立香が取り出したのは、金色に輝く盃、万能の願望機である聖杯だった。今ではサーヴァントの霊基強化に使われるそれを、立香はゆっくりとジャンヌ・オルタに差し出す。
「これを、受け取ってほしいんだ」
「……いいの？　私なんかに」
「うん、今日この日渡すって決めてたから。今日が何の日か、覚えてる？」
　問われて、ジャンヌ・オルタは首を振る。
「今日は、ジャンヌ・オルタの誕生日だよ。一年前の今日、君が召喚に応じてくれた日だ」
　言われてジャンヌ・オルタは思い出す。かつて自分が言った言葉を。
『アンタが私を召喚した日ってあるじゃない。あれ、誕生日みたいなもんだから』
「よく覚えてたわね……私だって忘れていたのに」
「忘れたくなかったからね。それと、もう一つ。物じゃなくて質問な

んだけど」
「何かしら？」
　立香は少し、顔を赤らめてから、口を動かす。
「本当は俺から先に言うつもりだったんだけどーー好きです、ジャンヌ・オルタ。俺とこれから先もずっと、一生一緒にいてください」
　飾り気のないストレートな言葉を、投げかける。
　ジャンヌ・オルタは一瞬ポカンとし、次の瞬間には、顔を真っ赤に染め上げた。
「い、いいい今のってまさか……」
「うん、プロポーズ、だよ」
　立香の顔も、ジャンヌ・オルタに負けないくらい赤くなっていた。しばらく二人とも沈黙が続いていたが、やがてジャンヌ・オルタの方が、先に口火を切る。
「――いいわよ、こんな竜の魔女で良ければ、いつだって、どんな時だって、地獄の底だろうとーーずっと側にいてあげるわ」
　聖杯を受け取り、身体を寄せて背伸びをする。柔らかい感触と音だけが、二人の感覚を支配した。
　やがて身体を離すと、ジャンヌ・オルタは意地悪く笑う。
「でも後悔しないでよ？　私は悪名高い竜の魔女。きっと幸せにはなれないわ」
「上等だ。絶対に幸せにしてみせる。俺の魂に誓ってね」
　二人は視線を交わし、どちらともなく笑った。
　朗らかな笑い声は、しばらくの間響き続けた。